

# 2026 年 7 月 19 日（日）第 562 回・NPO 法人グラウンドワーク三島のまちづくり

活動報告・組織論

## グラウンドワーク三島：梅花藻保全と次世代への承継

台湾インターン生への指導と高校生ボランティアによる新たな活力

🔗 組織論の深化：人的ネットワークを「線」にする

台湾人インターン生への修士論文助言

評価点

人的ネットワークの束ね方や役割分担の巧みな整理

改善の視点

「まちづくり」という活動基盤と目的の俯瞰的理解

「個々の役割という『点』が繋がり、活動目的という『線』となって初めて街は変わる」

🕒

CONTINUITY

30+

継続年数（毎週木曜）

09:30 活動開始  
三島清住緑地にて実施

🌟 五感で知る「即時的な達成感」

通信制高校「こころ未来学院」の生徒が初参加。16度の冷たい水に素足で入り、環境再生を体験。

☑️ 清掃直後、赤茶けた土が消え梅花藻が鮮やかな緑に蘇る劇的变化

👥 体験に感動した学校側が「ボランティア部」を創設し毎週参加を決定

👁️ 観光資源化への構想と広がる緑

20万 人/年の来訪目標

「第二の三島バイカモの里」としての清住緑地整備

📷 写真家による「人の思い」の記録  
水中カメラによる新たな視点での撮影計画

🗺️ 広域からの参加  
東京・神奈川から新幹線で駆けつける有志たち

☑️ アクションアイテム

@渡辺 豊博

@台湾インターン・カさん

@こころ未来学院

☐ 写真家を番組ゲストに招聘

☐ 修士論文に「まちづくり」視点を反映し再検討

☐ 毎週木曜09:30の清掃活動への継続参加

☐ 水中撮影の同行・現場サポート

☐ 市長選候補者向けの特別企画実施

🎧 Episode: 1979年の名曲「愛の水中花」と梅花藻の保全を重ねて

松坂慶子 五木寛之

本番組では、NPO 法人グラウンドワーク三島の専務理事である渡辺豊博氏が、台湾からのインターン生への指導や、三島梅花藻（ミシマバイカモ）の保全活動について語りました。

特に、高校生ボランティアや遠方からの参加者との協働を通じて、三島梅花藻の手入れが、いかに即時的な達成感と深い学びをもたらすか、そして、活動が持つ多角的な価値を解説しています。

## 台湾人インターン生への指導と論文への助言

台湾から約 2 週間のインターンシップに来ていたかさんが、昨日夕方に帰国したことが報告されました。

滞在中、彼女は、行政関係者、ボランティア、理事、企業、専門家、議員など、約 20 名のグラウンドワーク三島関係者に 1 回あたり 1 時間半から 2 時間をかけてヒアリングを実施しました。その内容を基に、中間支援組織の役割と人的ネットワークに関する修士論文の資料を作成しました。

渡辺氏は、5 時間半をかけて、その資料を添削し、渡辺氏を中心とした多様な人的ネットワークの束ね方や組織の役割分担の分析については、非常に巧みに整理されていると高く評価しました。

しかし、その一方で、活動の根底にある「三島のまちづくり」という目的や、75 ヶ所以上の実践プロジェクトといった活動の基盤に関する視点が不足していると指摘・指導しました。

個々の役割（点）が繋がり（線）となる、つまり「何のために組織があるのか」という足元の分析を深めるように助言しました。

物事をより深く、より広く理解するためには、少し高い位置から、全体を「俯瞰する」視点が不可欠であり、これによって組織と活動基盤が有機的に繋がり、街が変わっていくという組織論を解説しました。

## 三島梅花藻の保全活動①：高校生ボランティアとの協働

30 年以上、天候に関わらず毎週木曜日の午前 9 時半から続けられている、三島梅花藻の里での整備清掃活動について語りました。

今回は、通信制高校「こころ未来学院」の生徒たちが生徒会からの要請で初めてボランティアとして参加してくれました。生徒たちは素足で 16 度の水に入り、その冷たさや感触を五感で直接体験しました。

ベテランボランティアから清掃の目的や方法について説明を聞いた生徒たちは、覚えが早く、高い適応力を見せました。

掃除によって、赤茶けた土が取り除かれ、酸欠状態だった三島梅花藻が鮮やかな緑色に蘇る様子を目の当たりにし、作業の成果が即座に現れることに強い達成感と満足感を得たようです。

活動後、学校側から「ボランティア部を本格的に作り、来週から毎週参加します」という連絡があり、この体験が生徒たちの心に深く響き、継続的な関与へと繋がったことが報告されました。

## 三島梅花藻の保全活動②：新たな参加者と観光資源化への展望

境川・清住緑地にて、11 個のプランターに三島梅花藻を植え付け、水面を覆うように成長させる活動が報告されました。

この活動には、神奈川県大和市や東京から駆けつける参加者もあり、多様な人々が関わっています。

特に、清水町出身のある写真家は、単なる植物の記録ではなく「人と三島梅花藻の関わり」やそこに込められた「人の思い」をテーマに撮影を始め、今後は水中カメラでの撮影も計画しているといっています。

この湧水池を年間 20 万人が訪れる「第二の三島梅花藻の里」として観光資源化する構想も語られました。

一方で、山形市や滋賀県米原市といった他の梅花藻保全地域からは、後継者や資金の不足、高齢化といった共通課題から視察の依頼が来ており、三島の活動モデルが注目されている現状も明かされました。

## 雑談：「愛の水中花」と活動の関連性

三島梅花藻の話から連想し、1979 年にリリースされた松坂慶子さんのヒット曲「愛の水中花」が話題に上がりました。

渡辺氏は、この曲の作詞が、五木寛之氏であることに触れ、「乾いたこの花に水を与えてください」という歌詞が、三島梅花藻に酸素や水を与える保全活動と重なるとユーモラスに語りました。

また、「そうよ、人生なんてドラマじゃないわ」という一節に共感を示し、歌詞に出てくる「金色のレモンを胸に絞って」というフレーズに興奮する一幕もありました。

番組内では、八木治郎アナウンサーが、司会を務めた「野生の王国」など、昭和の番組や歌謡曲に関する懐かしい話題で盛り上がりました。